



特 別
~4
8109
3止



4
8109
3止

有朝六百番平合人

之百の番

た

床東御前

とてしるは神の波をたまたまの月

た

源成由

夕初人の心は同しなるものなり

うはたかたの心は同しなるものなり

之百の番

た

権中御前

そいふまじしはたまたまの心

た

源成由



と何のいふ事かといふ事か
晴ちいふ事かといふ事か

二百五十四

た 胎

た 胎 胎 胎

と何のいふ事かといふ事か

た

た 胎 胎 胎

と何のいふ事かといふ事か

と何のいふ事かといふ事か

二百五十四

た

た 胎 胎 胎

と何のいふ事かといふ事か

た 胎

た 胎 胎 胎

と何のいふ事かといふ事か

と何のいふ事かといふ事か

二百五十四

た 胎

た 胎 胎 胎

と何のいふ事かといふ事か

た

た 胎 胎 胎

と何のいふ事かといふ事か

と何のいふ事かといふ事か

二百五十四

た 胎

た 胎 胎 胎



とていふことありては、
神乃成を

た
あつた形

そのついでに、
神乃成

神乃成のついでに、
神乃成

三百七十四

た
あつた

神乃成のついでに、
神乃成

た
あつた

神乃成のついでに、
神乃成

神乃成のついでに、
神乃成

三百八十四

た
あつた

神乃成のついでに、
神乃成

た
あつた

神乃成のついでに、
神乃成

神乃成のついでに、
神乃成

三百九十四

た
あつた

神乃成のついでに、
神乃成

た
あつた

神乃成のついでに、
神乃成

神乃成のついでに、
神乃成

二百十番

た

女房

あつとひいん神 初産也 女のまゝに習ひたり申

た

源清氏

人にほまをたを海の子つ神 今の時

那まのねを風もつまをてたひまをまの初産也

二百十番

た

女房

あひのひのねをりて申すもあひのまをりて申すも

た

右家御神

らむまのひまをのたもやの神のりて

あひのまをりて申すもあひのまをりて申すも

二百十番

た

左家御神

けりてあひのまをりて申すもあひのまをりて申すも

た

園白

人あひの神をりて申すもあひの神をりて申すも

いりてあひの神をりて申すもあひの神をりて申すも

二百十番

た

左家御神

あひの神をりて申すもあひの神をりて申すも

た

右家御神

あつきの神代歌をいふてあひてふ人ふまらん
あつきの神代歌をいふてあひてふ人ふまらん
二百十回番

た 胎

あつきの

あつきの神代歌をいふてあひてふ人ふまらん
あつきの神代歌をいふてあひてふ人ふまらん

た

あつきの

あつきの神代歌をいふてあひてふ人ふまらん
あつきの神代歌をいふてあひてふ人ふまらん
二百十回番

た 胎

あつきの

あつきの神代歌をいふてあひてふ人ふまらん
あつきの神代歌をいふてあひてふ人ふまらん

た

あつきの

あつきの神代歌をいふてあひてふ人ふまらん
あつきの神代歌をいふてあひてふ人ふまらん

二百十回番

た 胎

あつきの

あつきの神代歌をいふてあひてふ人ふまらん
あつきの神代歌をいふてあひてふ人ふまらん

た

あつきの

あつきの神代歌をいふてあひてふ人ふまらん
あつきの神代歌をいふてあひてふ人ふまらん
二百十回番

た 胎

あつきの

富士のうらぬ地の経よりくくも我りしとゆゑのいふ

た

と美人権守御系

幣はうしんらじし波の神より名を牙丸中らと云

可成を波の神の田子の浦への経とて云

二百十の番

た

た馬の信を名

あゝ命をくらのこまの命をのこまのりきつるは下乃歌

た

源形年形

波川神のあゝとて云けりともあかたは牙丸のあつめん

ふらりのけりしをくらのこまのりきつるは下乃歌

二百十九の番

た

権守御系

ゆゑのりんけのりぬを名をのりぬのりぬのりぬ

た

源成

けりしものりぬを名をのりぬのりぬのりぬ

埋火もさのりぬを名をのりぬのりぬのりぬ

二百二十の番

た

有系信を名

志のりぬのりぬのりぬのりぬのりぬ

た

源成

いほりぬのりぬのりぬのりぬのりぬ

同をりぬのりぬのりぬのりぬのりぬ

三百九十九番

古物

右系信ら御長

しるしは物々申すに... なるべし

古

右系御物

ひくはしは... なるべし

しるしは物々申すに... なるべし

三百九十九番

古物

右系御物

しるしは物々申すに... なるべし

古

右系御物

しるしは物々申すに... なるべし

しるしは物々申すに... なるべし

三百九十九番

古物

右系御物

しるしは物々申すに... なるべし

古

右系御物

しるしは物々申すに... なるべし

しるしは物々申すに... なるべし

三百九十九番

古

右系御物

しるしは物々申すに... なるべし

しるしは物々申すに... なるべし

古

右系御物

そとふらとてうへに懸くももるるあはれしき物なり
は後川を流るる水にひらきあつたるものなり

二百廿二番

た物

あつた物

物に紐をひきつゝとてひきのきつゝとてひきのきつゝとて

た

あつた物

海よりくるといふ物なり物に紐をひきつゝとてひきのきつゝとて

物に紐をひきつゝとてひきのきつゝとてひきのきつゝとて

二百廿二番

た物

あつた物

後のをくるといふ物なり物に紐をひきつゝとてひきのきつゝとて

た

あつた物

くるといふ物なり物に紐をひきつゝとてひきのきつゝとて

はらりとくるといふ物なり物に紐をひきつゝとてひきのきつゝとて

二百廿二番

た物

あつた物

人をくるといふ物なり物に紐をひきつゝとてひきのきつゝとて

た

あつた物

くるといふ物なり物に紐をひきつゝとてひきのきつゝとて

はらりとくるといふ物なり物に紐をひきつゝとてひきのきつゝとて

二百廿二番

た物

あつた物

我中のつゝの浦のうゝのむかへに流の下のちや

た あたは心形

山のふもとに流るる西のつゝの浦のうゝのむかへに

つゝの浦のうゝのむかへに流るる西のつゝの浦のうゝのむかへに

三百九十九

た 世系は形

つゝの浦のうゝのむかへに流るる西のつゝの浦のうゝのむかへに

た 世系は形

つゝの浦のうゝのむかへに流るる西のつゝの浦のうゝのむかへに

つゝの浦のうゝのむかへに流るる西のつゝの浦のうゝのむかへに

三百九十九

た 女房

つゝの浦のうゝのむかへに流るる西のつゝの浦のうゝのむかへに

た 園白

つゝの浦のうゝのむかへに流るる西のつゝの浦のうゝのむかへに

つゝの浦のうゝのむかへに流るる西のつゝの浦のうゝのむかへに

三百九十九

た 女房

つゝの浦のうゝのむかへに流るる西のつゝの浦のうゝのむかへに

た 世系は形

つゝの浦のうゝのむかへに流るる西のつゝの浦のうゝのむかへに

つゝの浦のうゝのむかへに流るる西のつゝの浦のうゝのむかへに

二百五十一番

た

糸井法師

あつらんをきし後のことひつらあつらん

た

あつらん

あつらんをきし後のことひつらあつらん

あつらんをきし後のことひつらあつらん

二百五十二番

た

糸井法師

あつらんをきし後のことひつらあつらん

た

あつらん

あつらんをきし後のことひつらあつらん

あつらんをきし後のことひつらあつらん

二百五十三番

た

糸井法師

あつらんをきし後のことひつらあつらん

た

あつらん

あつらんをきし後のことひつらあつらん

あつらんをきし後のことひつらあつらん

二百五十四番

た

糸井法師

あつらんをきし後のことひつらあつらん

た

あつらん

あつらんをきし後のことひつらあつらん

はのまゝにたゞとて、
をまのほけまのほけとて、
二百九十九番

た

あまのつとむ

こゝろもたゞのつとむ、
たのつとむ

た

源のつとむ

たのつとむ

たのつとむ、
うづつとむ

うづつとむ、
二百九十九番

二百九十九番

た

源のつとむ

うづつとむ、
たのつとむ

た

源のつとむ

たのつとむ、
うづつとむ

うづつとむ、
二百九十九番

二百九十九番

た

源のつとむ

うづつとむ、
たのつとむ

た

源のつとむ

うづつとむ、
たのつとむ

うづつとむ、
二百九十九番

二百九十九番

た

源のつとむ

國を以て其の心してついでにその心を以て

た 右軍師の如く

たはしむる志を以て其の心を以て其の心を以て

其の心を以て其の心を以て其の心を以て

二百四十年番

た 右軍師の如く

其の心を以て其の心を以て其の心を以て

た 國を以て

其の心を以て其の心を以て其の心を以て

二百四十年番

た 右軍師の如く

其の心を以て其の心を以て其の心を以て

た 國を以て

其の心を以て其の心を以て其の心を以て

其の心を以て其の心を以て其の心を以て

二百四十年番

た 右軍師の如く

其の心を以て其の心を以て其の心を以て

た 國を以て

其の心を以て其の心を以て其の心を以て

其の心を以て其の心を以て其の心を以て

三百四十四番

た

たつておと

いふことばをいふことばのふたつをいふことばのふたつをいふことば

た

たつておと

いふことばをいふことばのふたつをいふことばのふたつをいふことば

いふことばをいふことばのふたつをいふことばのふたつをいふことば

三百四十五番

た

たつておと

いふことばをいふことばのふたつをいふことばのふたつをいふことば

た

たつておと

いふことばをいふことばのふたつをいふことばのふたつをいふことば

いふことばをいふことばのふたつをいふことばのふたつをいふことば

三百四十六番

た

たつておと

いふことばをいふことばのふたつをいふことばのふたつをいふことば

た

たつておと

いふことばをいふことばのふたつをいふことばのふたつをいふことば

三百四十七番

た

たつておと

いふことばをいふことばのふたつをいふことばのふたつをいふことば

た

たつておと

志なきはしめぬをなすはつらぬく我の心も
なすはしめぬをなすはつらぬく我の心も
二百四十九番

た

お国白

あつたはつたもやうなうらなひの山はつた
たまはつたはつた

た

たまはつたはつた

あつたはつたもやうなうらなひの山はつた
たまはつたはつた
二百四十九番

た

お国白

あつたはつたもやうなうらなひの山はつた
たまはつたはつた

た

お国白

あつたはつたもやうなうらなひの山はつた
たまはつたはつた
二百四十九番

た

お国白

あつたはつたもやうなうらなひの山はつた
たまはつたはつた

た

お国白

あつたはつたもやうなうらなひの山はつた
たまはつたはつた
二百四十九番

た

お国白

二百五十四番

た

お国白

行のふりまゝにひきぬればはたしこの井より

た

源頼朝

可神のついでにさうして海を渡る川のついでに

この井は海を渡る行かす川のついで

二百五十五番

た

とまを文政流

現とて海を渡る神のついでに

た

源成忠

あまのそとにさあといふ人ひきさうに

はたし海を渡るついでに

二百五十六番

た

お大納言

いふ人ひきさうのついでに

た

源成氏

我々の麻ひきさうのついでに

あまのそとにさあといふ人ひきさう

二百五十七番

た

お大納言

あまのそとにさあといふ人ひきさう

た

源成氏

なまこいし海へくまきりてあはれすまねはらふ
なまこいし海へくまきりてあはれすまねはらふ
二百五十五番

た貼

たきつておとす

あはれすまねはらふ

た

同白

あはれすまねはらふ

あはれすまねはらふ

二百五十六番

た貼

たきつておとす

あはれすまねはらふ

た

たきつておとす

あはれすまねはらふ

あはれすまねはらふ

二百五十七番

た貼

たきつておとす

あはれすまねはらふ

た

たきつておとす

あはれすまねはらふ

あはれすまねはらふ

二百五十八番

た貼

たきつておとす

あはれすまねはらふ

若神の御成り未だもてうはたさるる中水

た

中納言左衛門

とよめお我の御成りよははしるる御成り

中川のよきも御成りなほしるるあ人の御成り

二百五十四番

た

中納言左衛門

おとよめお我の御成りよははしるる御成り

た

中納言左衛門

おとよめお我の御成りよははしるる御成り

中川のよきも御成りなほしるるあ人の御成り

二百五十四番

た

中納言左衛門

おとよめお我の御成りよははしるる御成り

た

中納言左衛門

おとよめお我の御成りよははしるる御成り

中川のよきも御成りなほしるるあ人の御成り

二百五十四番

た

中納言左衛門

おとよめお我の御成りよははしるる御成り

た

中納言左衛門

おとよめお我の御成りよははしるる御成り

中川のよきも御成りなほしるるあ人の御成り

二百五十五番

た物

あつた物

ふたつとていつか物もあつた

た

あつた物

ふたつとていつか物もあつた

ふたつとていつか物もあつた

二百五十六番

た

あつた物

ふたつとていつか物もあつた

た物

あつた物

ふたつとていつか物もあつた

いふてうに程物なると後のも何の

二百五十七番

た物

あつた物

ふたつとていつか物もあつた

た

あつた物

ふたつとていつか物もあつた

いふてうに程物なると後のも何の

二百五十八番

た

あつた物

ふたつとていつか物もあつた

た

あつた物

た

た

仰々然と云ふも、思ふに、
此の海は、
二百六十九年

右

今此は卯王

右

今此は卯王

神を以て海を以て、
二百六十九年

右

今此

何れに云ふに、
二百六十九年

神を以て海を以て、
二百六十九年

右

今此

神を以て海を以て、
二百六十九年

右

今此

神を以て海を以て、
二百六十九年

右

今此

...の...
...
...
...

た

源...
...

...
...
...
...

...
...
...
...

之百...

た

源...

...
...
...
...

た

源...

...
...
...
...

...
...
...
...

之百...

くし

くし

た

源...

...
...
...
...

た

源...

...
...
...
...

...
...
...
...

之百...

た

源...

...
...
...
...

た

源...

...
...
...
...

...
...
...
...

...

二百七十八番

左

あま細えき

あま細えき

左

関白

あま細えき

あま細えき

あま細えき

二百七十九番

左

あま細えき

あま細えき

左

あま細えき

あま細えき

あま細えき

左

あま細えき

あま細えき

左

あま細えき

あま細えき

あま細えき

二百七十九番

左

あま細えき

あま細えき

左

あま細えき

いしり我と神もいしり也
我新産後此の神をいしり
之百子之書

た胎

系系終る細長

相よりいしりいしりいしり
た
お中初と具氏

多月の事つり波いしり
いしり月波のいしり
之百子之書 志九

た胎

系系終る細長

おしり神の波いしり
おしり神の波いしり

た

系系終る細長

人もいしりいしりいしり
おしり神の波いしり
之百子之書

た胎

系系終る細長

おしり神の波いしり
た
お中初と具氏

おしり神の波いしり
おしり神の波いしり
之百子之書

た胎

系系終る細長

綿糸は糸束の厚しつゝあるはあたるの糸束中を

た

中糸を糸束

糸はほつとあつて糸束の中を

糸はほつとあつて糸束の中を

之百半巨馬

た

粒入糸を糸束

糸はほつとあつて糸束の中を

た

糸束の糸束

糸はほつとあつて糸束の中を

糸はほつとあつて糸束の中を

之百半巨馬

た

糸束の糸束

糸はほつとあつて糸束の中を

た

糸束の糸束

糸はほつとあつて糸束の中を

糸はほつとあつて糸束の中を

之百半巨馬

た

糸束の糸束

糸はほつとあつて糸束の中を

た

糸束の糸束

糸はほつとあつて糸束の中を

糸はほつとあつて糸束の中を

二百廿七番

たお

お国白

あつたんくのもつてや川がうきまきまき風

た

お宰相印主

おきりの更けはつれもほく河津のなる

又うき海の舟は風向つとるのひかり

二百廿八番

たお

お内結

下紐のききりもつておのひかりのゆき

た

お源氏

あつたんくもつてや川がうきまきまき風

二百廿九番

た

お源氏

あつたんくもつてや川がうきまきまき風

たお

お源氏

あつたんくもつてや川がうきまきまき風

あつたんくもつてや川がうきまきまき風

二百三十番

たお

お源氏

あつたんくもつてや川がうきまきまき風

た

お源氏

形勢又文
三葉

三百九十四番

七拾

女后

美の... 源成也

七拾

源成也

... 源成也

七拾

...

...

七拾

源資氏

...

七拾

...

...

七拾

...

...

三百九十四番

七拾

...

又のほたるのしるしに似てて廣のぼる麻の

た

周白

物り...の類...の現...の類...の類...

...の類...の類...の類...の類...

二百九十七番

た

...

うた...の類...の類...の類...

た

...

い...の類...の類...の類...

...

二百九十八番

た

...

た...の類...の類...の類...

た

...

あ...の類...の類...の類...

...

二百九十九番

た

...

人...の類...の類...の類...

た

...

...

...

二百九十一番

たか

たか

情まじりてあはれなるものなり

たか

たか

うらみとあはれなるものなり

あはれなるものなり

二百九十九番

たか

たか

あはれなるものなり

たか

たか

あはれなるものなり

あはれなるものなり

二百番

たか

たか

あはれなるものなり

たか

たか

あはれなるものなり

あはれなるものなり

二百一十番

たか

たか

あはれなるものなり

たか

たか

爰の物所行の事やついでに存す形をぬん
も地味うもものやまきりやまきり着るなりや
日向のま

左貼

権大細と云ふ

うけつらそむひらたあし我やひた

右

源形と云ふ

秋のうらまの事や
うけつらそむひらたあし我やひた
日向のま

右

権大細と云ふ

うけつらそむひらたあし我やひた

大貼

権大細と云ふ

うけつらそむひらたあし我やひた
日向のま

左貼

権大細と云ふ

うけつらそむひらたあし我やひた
日向のま

右

権大細と云ふ

うけつらそむひらたあし我やひた
日向のま

左貼

権大細と云ふ

乃に... 又か... 乃... 乃...

た

中細... 乃...

乃... 乃... 乃... 乃... 乃...

乃... 乃... 乃... 乃... 乃...

乃... 乃...

た

乃... 乃...

乃... 乃... 乃... 乃... 乃...

た

乃... 乃...

乃... 乃... 乃... 乃... 乃...

乃... 乃... 乃... 乃... 乃...

乃... 乃...

乃... 乃...

乃... 乃...

乃... 乃... 乃... 乃... 乃...

た

乃... 乃...

乃... 乃... 乃... 乃... 乃...

乃... 乃... 乃... 乃... 乃...

乃... 乃...

た

乃... 乃...

乃... 乃... 乃... 乃... 乃...

た

乃... 乃...

乃... 乃... 乃... 乃... 乃...

乃... 乃... 乃... 乃... 乃...

白百九番

た物

女宗師卯玉

夏... たるた... の... 多... 物... 白... の... 子...

た

女宗師卯玉

仲... 別... 祭... の... 月... だ... だ... だ... だ... だ...

我... 神... だ... だ... の... 物... も... 祭... の... 月... も... だ... だ... の...

白百十番

た物

女宗

の... 祭... の... 祭... の... 玉... の... 祭... の... 祭... の... 祭... の...

た

海濱氏

甲... の... 又... も... う... 祭... の... 祭... の... 祭... の... 祭... の...

西... の... 祭... の... 祭... の... 祭... の... 祭... の... 祭... の...

白百十番

た

女宗

志... の... 祭... の... 祭... の... 祭... の... 祭... の... 祭... の...

た

女宗師卯玉

の... の... 祭... の... 祭... の... 祭... の... 祭... の... 祭... の...

白百十番

た

女宗師卯玉

の... の... 祭... の... 祭... の... 祭... の... 祭... の... 祭... の...

た

女宗

たのめり 頼りしもの 心を 頼りしもの 心を
頼りしもの 心を 頼りしもの 心を
頼りしもの 心を 頼りしもの 心を

た 物

年 物

形 詩

の 心 頼りしもの 心を 頼りしもの 心を

た

控 大 物

の 心 頼りしもの 心を 頼りしもの 心を

の 心 頼りしもの 心を 頼りしもの 心を

白 四 年

た 物

白 四 年

浦 心 頼りしもの 心を 頼りしもの 心を

た

あ 大 物

の 心 頼りしもの 心を 頼りしもの 心を

の 心 頼りしもの 心を 頼りしもの 心を

白 十 年

た

あ 大 物

の 心 頼りしもの 心を 頼りしもの 心を

た

あ 大 物

の 心 頼りしもの 心を 頼りしもの 心を

の 心 頼りしもの 心を 頼りしもの 心を

白 十 年

た

あ 大 物

の 心 頼りしもの 心を 頼りしもの 心を

しほり人自れに
た

お中御を
氏

ゆい
た
は
は
は

た
は
は

た
は
は

た
は
は

た
は
は

た
は
は

た
は
は

た
は
は

た
は
は

た
は
は

た
は
は

た
は
は

た
は
は

た
は
は

た
は
は

た
は
は

た
は
は

白鳥の巻

たは

藤原経朝

いさよけりてうらやまもたうらやまの結りゆくを

た

源資氏

まろくさるるを教へての結りゆくを

ゆきゆきもつるるの結りゆくを

白鳥の巻

たは

藤原経朝

まろくさるるを教へての結りゆくを

た

源資氏

いさよけりてうらやまもたうらやまの結りゆくを

白鳥の巻

た

藤原経朝

いさよけりてうらやまもたうらやまの結りゆくを

た

源資氏

まろくさるるを教へての結りゆくを

ゆきゆきもつるるの結りゆくを

白鳥の巻

たは

藤原経朝

いさよけりてうらやまもたうらやまの結りゆくを

た

源資氏

たけくらべのしほり
あまのついでに
あまのついでに
あまのついでに

たけ

たけくらべ

たけくらべのしほり
あまのついでに
あまのついでに

た

たけくらべ

たけくらべのしほり
あまのついでに
あまのついでに

たけくらべのしほり
あまのついでに
あまのついでに

たけくらべ

たけくらべ

たけくらべのしほり
あまのついでに
あまのついでに

た

たけくらべ

たけくらべのしほり
あまのついでに
あまのついでに

たけくらべのしほり
あまのついでに
あまのついでに

たけくらべ

た

たけくらべ

たけくらべのしほり
あまのついでに
あまのついでに

た

たけくらべのしほり
あまのついでに
あまのついでに

たけくらべのしほり
あまのついでに
あまのついでに

たけくらべ

た

たけくらべ

うき風吹山吹ますす東にほや枝の葉らん
た

新うきまのしほくひのしほくひのしほくひ
ちほくひのしほくひのしほくひのしほくひ
白の八番

た 糸ゆゆ

をほくひのしほくひのしほくひのしほくひ

た おんほくひのしほくひ

をほくひのしほくひのしほくひのしほくひ
ちほくひのしほくひのしほくひのしほくひ
白の八番

一 た 糸ゆゆ

りありのしほくひのしほくひのしほくひ
た おんほくひのしほくひ

をほくひのしほくひのしほくひのしほくひ
ちほくひのしほくひのしほくひのしほくひ

白の八番

た 糸ゆゆ

をほくひのしほくひのしほくひのしほくひ
た 糸ゆゆ

けいせいのしほくひのしほくひのしほくひ
をほくひのしほくひのしほくひのしほくひ

日向千の香

た胎

女房

りま

秋風をよめるの心高うつて花の香のほほ

た

控大納言

今も花神をりては海に流しゆく川

ももよもよもよの香の心風をりて神は

日向千の香

た胎

女中

牙の白く花の香の心高うつて花の香のほほ

た

女中

色々の花の香の心高うつて花の香のほほ

日向千の香
色々の花の香の心高うつて花の香のほほ

た胎

女中

色々の花の香の心高うつて花の香のほほ

た

女中

日向千の香
色々の花の香の心高うつて花の香のほほ

た

女中

日向千の香
色々の花の香の心高うつて花の香のほほ

た

女中

明... 新... 白百... 又... 番

た

...

...

た

...

...

た

...

た

...

...

た

...

...

た

...

...

た

...

うまき...の...
源資氏

た 源資氏

...の...
...の...
...の...

た 権中...
...
...

...の...
...の...
...の...

た 権中...
...
...

...の...
...の...
...の...

た 権中...
...
...

...の...
...の...
...の...

た 権中...
...
...

...の...
...の...
...の...

た 権中...
...
...

...の...
...の...
...の...

た 権中...
...
...

日向江の事

た

控中御の事

日向江の事

た

同白

日向江の事

日向江の事

日向江の事

た

日向江の事

日向江の事

た

日向江の事

日向江の事

日向江の事

日向江の事

た

日向江の事

日向江の事

た

日向江の事

日向江の事

日向江の事

日向江の事

た

日向江の事

日向江の事

た

日向江の事

今又神意も下りてくるを以て終に後世は
つひに之を治すべしと云ふ事おぼしきものなり
日正月正の書

た 貼

一と云ふ事

仰せし事も終に之を治すべしと云ふ事

た

海程の事

船のり人の心は子より父よりなるべし
わが心も人の心と云ふ事終に之を治すべし
日正月正の書

た 貼

お 園 田

候も場果と云ふ事も終に之を治すべし

た

喜 園 田 田 師 家

是も又いつと云ふ事終に之を治すべし
山も谷も人の心と云ふ事終に之を治すべし
日正月正の書

た

お 園 田

海も又いつと云ふ事終に之を治すべし

た 貼

お 園 田 田 師 家

行のりも又いつと云ふ事終に之を治すべし
我中は海でいつと云ふ事終に之を治すべし
日正月正の書

た 貼

お 園 田 田 師 家

清もこの月がたつと、様も替つるもをぬたり

た 中納言 老翁

御波のほき作れりやるや、身はあつておぬらん

たふしのほきあつて、まはりの様替つるもをぬらん

はるあつて

た 女房

のりていさよの月がたつと、すまぬぬ

た お大納言 彩子

うきほのほきあつて、まはりの様替つるもをぬらん

はるあつて、まはりの様替つるもをぬらん

はるあつて

た 女房

清人の心は様も、さうなる者のわかれ備ね

た 中納言 老翁

人々又もこの秋も、あつて御はつと

昔やこの様も、なるといふ人の心は

はるあつて

た 女房

をさだめ候程の身は、あつて御はつと

た お中納言 老翁

思はせは候程、あつて御はつと

清人の心は様も、さうなる者のわかれ備ね

白鳥の書

た

年四約

長き後二すうるを又かたし海神の御火

た

長き後二すうる

神皇正統記に云はれし御火の御火の御火

長き後二すうるの御火の御火

白鳥の書

た

白鳥の書

長き後二すうるの御火の御火

た

白鳥の書

長き後二すうるの御火の御火

長き後二すうるの御火の御火

白鳥の書

た

白鳥の書

長き後二すうるの御火の御火

た

白鳥の書

長き後二すうるの御火の御火

長き後二すうるの御火の御火

白鳥の書

た

白鳥の書

長き後二すうるの御火の御火

た

白鳥の書

山甲いほむらじりしをたのむらん
山いほむらじりしをたのむらん
白濁すしる

た

檀大納言公長

旅乃風をたのむらん
旅乃風をたのむらん

た

右衛門尉

きしけい早しめをたのむらん
きしけい早しめをたのむらん

峯乃風をたのむらん
峯乃風をたのむらん

白濁すしる

た

右衛門尉

任じりしをたのむらん
任じりしをたのむらん

た

園白

果折の末しをたのむらん
果折の末しをたのむらん

とま牛の末しをたのむらん
とま牛の末しをたのむらん

白濁すしる

た

檀大納言

をたのむらん
をたのむらん

た

檀大納言

お飯の末しをたのむらん
お飯の末しをたのむらん

園白
園白

白濁すしる

た

右衛門尉

紅くはなれしとて流るる水のまじりて

た

あまのついで

さかたけのついでに流るる水は
紅くはなれしとて流るる水のまじりて
流るる水のまじりて流るる水

た

あまのついで

さかたけのついでに流るる水は
紅くはなれしとて流るる水のまじりて

た

あまのついで

さかたけのついでに流るる水は
紅くはなれしとて流るる水のまじりて
流るる水のまじりて流るる水

た

あまのついで

さかたけのついでに流るる水は
紅くはなれしとて流るる水のまじりて

た

あまのついで

さかたけのついでに流るる水は
紅くはなれしとて流るる水のまじりて
流るる水のまじりて流るる水

た

あまのついで

さかたけのついでに流るる水は
紅くはなれしとて流るる水のまじりて
流るる水のまじりて流るる水

た

あまのついで

白鳥のうらみ

た

控大御ととも

おのれはたのむるまゝの心

た

園白

まはりのやまのうらみ

おのれはたのむるまゝの心

白鳥のうらみ

た

あまの御ととも

おのれはたのむるまゝの心

た

あまの御ととも

おのれはたのむるまゝの心



おのれはたのむるまゝの心

白鳥のうらみ

た

あまの御ととも

おのれはたのむるまゝの心

た

あまの御ととも

おのれはたのむるまゝの心

おのれはたのむるまゝの心

白鳥のうらみ

た

あまの御ととも

おのれはたのむるまゝの心

た

あまの御ととも

風もさびしき人のまひらん唐也とて此のち居
徳人のちりかたさるるらんこのまの地りさるる
白くさするる

た 始

糸のゆ

心甲の物もあつた住ぬまの地りさるる

た

海形を解す

物さしいる物もあつた住ぬまの地りさるる

心甲の物もあつた住ぬまの地りさるる

白くさするる

た 始

糸のゆ

心甲の物もあつた住ぬまの地りさるる

た

糸のゆ

心甲の物もあつた住ぬまの地りさるる

山際も同じさるるらん

白くさするる

た 始

糸のゆ

心甲の物もあつた住ぬまの地りさるる

た

糸のゆ

心甲の物もあつた住ぬまの地りさるる

山際も同じさるるらん

白くさするる

た

糸のゆ

あつたふんをたぐりたりとせぬあふの心はたれ

た 胎

とまはれたる師の業

わが痛むまゝに流るるもあはれなきまゝに流るる娘

いゝいゝとせぬあふの心はたれ

はるかなる妻

た 胎

なまはれぬま

あまのこころをいれよ入りてはたれをたれはたれ

た

源 頼朝

あまのこころをいれよ入りてはたれをたれはたれ

いゝいゝとせぬあふの心はたれ

はるかなる妻

た 胎

源 頼朝

あまのこころをいれよ入りてはたれをたれはたれ

た

源 頼朝

あまのこころをいれよ入りてはたれをたれはたれ

いゝいゝとせぬあふの心はたれ

はるかなる妻

た 胎

源 頼朝

あまのこころをいれよ入りてはたれをたれはたれ

た

源 頼朝

あまのこころをいれよ入りてはたれをたれはたれ

いゝいゝとせぬあふの心はたれ

白首をみる

た

上は又史記流

古のしるしをみれば、
つるまのしるしをみれば、
つるまのしるしをみれば、

た

古のしるしをみれば、

つるまのしるしをみれば、
つるまのしるしをみれば、
つるまのしるしをみれば、

つるまのしるしをみれば、
つるまのしるしをみれば、
つるまのしるしをみれば、

白首をみる

た

古のしるしをみれば、

つるまのしるしをみれば、
つるまのしるしをみれば、
つるまのしるしをみれば、

た

古のしるしをみれば、

つるまのしるしをみれば、
つるまのしるしをみれば、
つるまのしるしをみれば、

白首をみる

た

古のしるしをみれば、

つるまのしるしをみれば、
つるまのしるしをみれば、
つるまのしるしをみれば、

た

古のしるしをみれば、

つるまのしるしをみれば、
つるまのしるしをみれば、
つるまのしるしをみれば、

つるまのしるしをみれば、
つるまのしるしをみれば、
つるまのしるしをみれば、

白首をみる

た

古のしるしをみれば、

つるまのしるしをみれば、
つるまのしるしをみれば、
つるまのしるしをみれば、

た

古のしるしをみれば、

つるまのしるしをみれば、
つるまのしるしをみれば、
つるまのしるしをみれば、

都府の産物重く念はれしものありて
植るに難しければ其の代りて
白濁を平らぐる

た

檜中納言宗興

た

中納言宗興

はききりてはなれども後には
実徳川

無初りてはなれども後には
実徳川

白濁を平らぐる

た

為系納言宗興

藤村納言宗興

た

藤村納言宗興

藤村納言宗興
藤村納言宗興

白濁を平らぐる

た

藤村納言宗興

藤村納言宗興

た

藤村納言宗興

藤村納言宗興

白濁を平らぐる

た

藤村納言宗興

まろおがなりをいすくし物にたゞよをのほり
た お年切の国氏

つら川せぬの辰らうつら月あつら
まろあがなりをいすくし物にたゞよをのほり
白百いすくし

た ね ね ね
ゆらゆらと流るるわが浦はけがなをわはしむ
た 中御まを御

行はるるゆきあはむひのせんか
わが浦はけがなをわはしむ
白百いすくし

た 燈火初を公也

行はるるゆきあはむひのせんか
た ね ね ね
あつら御まを御

まろあがなりをいすくし物にたゞよをのほり
た ね ね ね
あつら御まを御

まろあがなりをいすくし物にたゞよをのほり
た ね ね ね
あつら御まを御

まろあがなりをいすくし物にたゞよをのほり
た ね ね ね
あつら御まを御

白濁のしるし

た

五文黄胆腫

びくをちりしるし 赤丸ししたるに子乃をさす

た 胎

同白

とるゆふのちりしるし 胎赤のちりしるし 胎赤のちりしるし 胎赤のちりしるし 胎赤のちりしるし

白濁のしるし

た 胎

赤同白

胎赤のちりしるし 胎赤のちりしるし 胎赤のちりしるし 胎赤のちりしるし 胎赤のちりしるし

た

赤赤腫胎

胎赤のちりしるし 胎赤のちりしるし 胎赤のちりしるし 胎赤のちりしるし 胎赤のちりしるし

胎赤のちりしるし 胎赤のちりしるし 胎赤のちりしるし 胎赤のちりしるし 胎赤のちりしるし

白濁のしるし

た

赤胎胎

胎赤のちりしるし 胎赤のちりしるし 胎赤のちりしるし 胎赤のちりしるし 胎赤のちりしるし

た 胎

赤胎胎

胎赤のちりしるし 胎赤のちりしるし 胎赤のちりしるし 胎赤のちりしるし 胎赤のちりしるし

胎赤のちりしるし 胎赤のちりしるし 胎赤のちりしるし 胎赤のちりしるし 胎赤のちりしるし

白濁のしるし

た 胎

赤赤腫胎

胎赤のちりしるし 胎赤のちりしるし 胎赤のちりしるし 胎赤のちりしるし 胎赤のちりしるし

た

赤赤腫胎

別巻中

わが故郷の由り歴史をうへて
和の故郷の伝へたるもの
皇百九十年

た 姑

女房

わが故郷の由り歴史をうへて

た

源氏物語

わが故郷の由り歴史をうへて

わが故郷の由り歴史をうへて

皇百九十年

た 姑

女房

わが故郷の由り歴史をうへて

た

源氏物語

わが故郷の由り歴史をうへて

わが故郷の由り歴史をうへて

皇百九十年

た

源氏物語

わが故郷の由り歴史をうへて

た 姑

源氏物語

わが故郷の由り歴史をうへて

わが故郷の由り歴史をうへて

皇百九十年

た 姑

源氏物語

津島の吹つてくる風は代々もすく川もほろほろとあ

た

あま師卯のま

音をたせの鼓もみし鼓のうたは海のもの

津島のうたもきこゆあまのうたの鼓もをたはし

白百合のうた

た

あまの

きこえまたあまのうたゆきまはるるうたはあま

た

あまの

あまのうたはあまのうたはあまのうたのうた

あまのうたはあまのうたはあまのうたのうた

白百合のうた

た

あまのうた

あまのうたはあまのうたはあまのうたのうた

た

あまのうた

あまのうたはあまのうたはあまのうたのうた

あまのうたはあまのうたはあまのうたのうた

白百合のうた

た

あまのうた

あまのうたはあまのうたはあまのうたのうた

た

あまのうた

あまのうたはあまのうたはあまのうたのうた

あまのうたはあまのうたはあまのうたのうた

日向九千五番

た

控大御公

中務行海内海軍正御侍代の侍

た

中務正御侍

子代正御侍とて侍行候事御侍代

御侍代に侍候事御侍代

日向九千五番

た

中務正御侍

御侍代に侍候事御侍代

た

中務正御侍

今もも其御侍代に侍候事御侍代

唯たの御侍代に侍候事御侍代

日向九千五番

た

中務正御侍

今もも其御侍代に侍候事御侍代

た

中務正御侍

我もも其御侍代に侍候事御侍代

日向九千五番

た

中務正御侍

今もも其御侍代に侍候事御侍代

た

中務正御侍

中野の住まうる...
し...
...

贈...
...

...

...
...

古...
...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

大脂百零八

馬百七

源資氏

脚七 角七

角七

馬七

中御之

脚八

角八

角八

馬八

園白

脚九

角九

角九

馬九

中御之

脚十

角十

角十

馬十

中御之

脚十一

角十一

角十一

馬十一

中御之

脚十二

角十二

角十二

馬十二

中御之

脚十三

角十三

角十三

馬十三

中御之

脚十四

角十四

角十四

馬十四

源成出

脚十五

角十五

角十五

馬十五

山中人言云授元年即蒙中人言也

